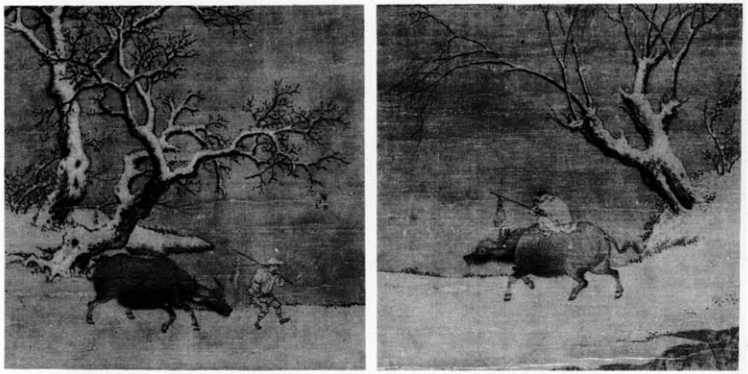
大和文華館蒐集ものがたり3

益田家の李迪

大和文華館々長　矢代幸雄



国宝　雪中帰牧図双幅　李迪筆
絹本著色
中国・南宋時代
23.5×23.5cm

大和文華館の蔵品の中に、横浜の原三渓コレクションの名品が多数含まれていることは、既にお話しましたが、今回は、当時原翁と並ぶ実業家大茶人であり、且つ大コレクターであった益田孝男爵（鈍翁）の愛蔵品で、現在当館のコレクションに入っている名品について、お話し致しましょう。

その最高の一つ、李迪筆雪中帰牧図双幅は、益田家にあった時分には、殆んど何処にも公開展覧されたことが無く、私がそれを見た唯一の機会は、ずっと以前、原三渓翁に連れられて、同翁の親友であった品川御殿山の益田鈍翁邸を訪れた時、そこの茶室においてでありました。私はそれを見た時、覚えずあゝとため息をついたほど驚嘆したことは、今に至っても忘れません。その頃、私はまだ若くて、且つ西洋美術史を専攻して居り、小むづかしい書物ばかり読み過ぎて美の本能を忘れたような東洋の学者の入り組んだ芸術論など、あまり何とも思っていないという、謂わば未熟な若気の至りの年頃でありました。

そういう或る日、私は原翁によって偶然に益田邸へ連れて行かれ、その茶室に於て、この李迪の双幅を初めて見せられたのでありました。そして私はその何とも言われない美と高趣とに、全く魅了されてしまったのでした。益田家の茶室の沈静した光線も丁度よかったのでしょうが、その薄すあかりの中で、この精緻な宋絹の淡い灰色の調子の上に、筆はしっかりと、然しながら感じは霞むほどに淡く、且つ柔かく描かれて居る冬景色が、蒼茫として、滲じむが如く、或いはまた匂うが如く、霞んで見えたのが、私にとって、全くたまらないものでした。その画の何とも言われない静寂な趣によって、私はすっかり感動させられたわけでありました。

この画は小品ですが、描写は頗る精到で、立体感覚は全般的にしっかりしており、東洋画の自然描写としても、頗る興味ある傑作でありました。即ちこの画家の持っていた自然感覚と描写力とは、実に凄いものだ、と私は思ったのでありました。この双幅の他に、李迪の信頼し得る作品としては、福岡家旧蔵の有名な紅白芙蓉図双幅（現在、東京国立博物館蔵）があります。花鳥図に関しては、我国に渡来した中国画中にいろいろの優作が数えられますが、雪中帰牧図に関しては、その種のものとして、私はこれに越える名作は、他に考えようとしても、思い当らないのであります。私はこの図を以て、現存中国画中の最高品のうちに数えるに、躊躇しないのであります。これほどの名作が、後に思いがけなく、わが大和文華館の所蔵に帰したことは、頗る幸福なる因縁によったものであると、私はその奇縁を喜んで居る次第であります。

季刊 美のたより No.7
昭和43年10月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.